# されど現実は夢の如く

豪気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
されど現実は夢の如く

【Ｎコード】
Ｎ８４４１Ｍ

【作者名】
豪気

【あらすじ】
誰だって間違った事はある。
生きている時だって、実は何十回も。
誰が間違ったなんて言った。誰だ誰だ、一体誰だ。どうせ間違っている。これもあれもどれもそれも。
この物語も、少し間違っているけど気にしない。
だって、何度も間違っているんだから。

※とりあえず、注意事項を。

・今作品は原作乖離します。

・一部キャラのＴＳ有り。

・一部キャラ崩壊の可能性有り。

・オリ主、オリキャラ有り。

・作者の独自設定＋解釈有り。

・ご都合主義。

・縦読み推奨（ＰＣの方のみ）

以上の注意事項を守れる方のみ、お読み下さい。期間限定の可能性有り。

## 第一話　大地の世界

――――切に願う。万物を見守る光輝く黄金の月に。

月は影を露にし、目の前に広がる水溜まりを神々しく照らす。

顔は既に青に染まり、四肢は一定の振動を繰り返し瞳孔は開き額から溢れる汗を拭う事を知らない。

ただただ状況が理解できないのだ。

否、理解したくない。

「そ――――うか」

譫言を繰り返す様はなんとも腑抜けた面以外なにものでもない。

意識を手放す事ができずに視界にはまるソレを隅から隅まで脳内に刷り込んでいた。

――――そして、額から滴る汗はそのまま重力に従い地面へと落ちていく。

だが汗は地の栄養となることはなく、水溜まりへと混合されていく。

鮮血。

汗が滴り落ち鮮やかな赤はを起こし、落ちた場所を中心に波紋が

広がっていく。

逃走する事はなく、叫ぶ事はなく、意識を手放す事もなく。

背は向けない。

その行動の意さえ分からない。

如何に自分は無力かを思い知らされる。

絶望という杭は既に打たれた。

視えない。何も視えない。

地も空も海も人も物もモノも何もかも――――。

「そ――――うか。そうなのか。そうかそうかそうかそうかそうかそうかそうか――――」

死地となった赤き大地を背に両手を広げ、無邪気に微笑んだ。

得物は涎を垂らす様に刀身から血を滴り落とし、黒き太陽の陽光に反射し得物もまた、微笑んでいる様に見えた。

「もう――――いいよな？」

大地が噴火するの如く隆起する。

破裂する赤き閃光。

嗄れた喉から搾られた小さな呟きでさえ、一瞬の光に飲み込まれていく。

「――――」

刹那。

赤き大地を作り上げた男は。

この地の終わりと共に。

大地の英雄、モノの死神と謳われた人間は。

酷使した身体、摩耗した精神と共に。

――何もかも、消えていってしまった。

†††††

さて、ここで少し遠い御話を語るとしよう。

何、難しい話ではない。たった一場面を視聴するだけだから。

始まりは夕闇を照らす弾幕と化す光。肌を焦がす程の灼熱が大地を走り、緑茂る森林に朱の彩りを付け足す。

雲を裂き、大地を揺らし、空を駆ける数多の物体。

その数、百以上。

空は巨大戦艦で覆われ地は何体もの巨大な人型のバケモノが踏み締める。

その間を縫う様に何百人もの人間が杖に股がり、各々武器を持ち目的地へと飛翔する。

「せ、精霊砲全弾消失！」

誰かが喉を潰す勢いで叫ぶ。

「消失！？　王都の魔法障壁ではないのか！？」

会話の間にも巨大航空戦艦、人型のバケモノ———鬼神兵、人間———魔法使いが目的のそれへと矛先を向ける。

ある者は光弾を、砲撃を、衝撃を、爆撃を、剣戟を。

それすら全て目的は叶わず消失していく。

不安と驚愕と疑心暗鬼に満ちる表情。

「広域魔力減衰現象を確認！　減衰速度加速中……間違いありません！！」

箒に股がり仲間へと情報を伝達させる。

額には汗が滲み、ふと気を緩ませるだけで意識を手放してしまう程、場の雰囲気は熱を持っている。

殺気を持つ熱。

鬼神兵が唸り声を上げる。熱から逃げる様に巨腕をソレへと薙ぎ倒す。

だが、それすら億劫。

鬼神兵の視線の先には、矢継ぎ早に声を上げる誰かの言葉の内容のソレが居た。

「あれは――――黄昏の姫御子です！！」

†††††

眼前に映す光の斑点。

主張するかの様に幾つもの光を発し、それは瞬時に消えていく。

耳に響く喧騒。

身体の内側から溢れでる違和感。

ただ何もせず、虚ろな瞳で宙を見詰める。

「……」

だから、自分がどうなるかなんて知った事ではなかった。

元より、己には何一つないのだから。

言葉に表すなら“無”。

これからどうなろうが、知った事ではない。

「――――あ」

気付けば、目の前には命を潰す巨腕。

手足は鎖で動けず、身体も云うことを訊かず動作一つも起こせない。

一概に――――死ぬんだ、と思う事はなかった。

何故なら、今でさえ死んでる様なものだから。

蝋燭に灯る火の如く、吹き掛ければ消し炭になってしまう心。

何もせず何も出来ず何も起こせず何も感じず何も思えず何も何も何も――――。

ただ唇に付いた血の味が、妙に現実的で――――。

眼前に迫る巨腕と己の間に顕れたダレかの影が、まるで巨腕を阻む様に“わたし”を覆った。

「あなた……だれ？」

動かないと思っていた唇が自然と言葉を発していた。

ただ自然に。

己さえ気付く事なく。

ただ淡々と。

視線を落としていながらも言の葉を紡ぐ。

「――――ふん」

黒い影は刹那の一閃で巨腕を断ち斬り、言葉を発した少女へと身体を向ける。

霧散する鬼神兵の巨腕。

覆う影は消える。

地響きを起こす苦痛の叫びが肌を震わせる。

黒い影が所持する小さな得物が視界に入り、刀身が鏡の様に少女を映す。

何が可笑しいのか、黒い影はクスリと喉元を鳴らす。

何故黒い影かって？

顔を俯かせていたからに他ならない。

だから、影が笑っていたのなんて知る事も出来なかった。

「……さて、いつの間にか此処に居るが、怪我は無いか」

「……」

初めは誰に言っているのか判らなかった。

耳に届く若い声音。

さして驚く事なく、虚無を見詰める少女は視点を上げる。

交差する双眸と双眸。

初めて少女は黒い影の瞳の内に居る自分に気付く。

肥大化する戦禍。

静寂を保っているこの空間の外側では尚も戦火が回っている。

「……？」

初めて少女は意思を表す。

外の戦闘ではなく、黒い影へと意志を表す。

「……ああ、そうか。己（オレ）が判らないか。無理もない、突然目の前に不審者がに顕れたら己だって困るな」

「……あなた、誰？」

再度言葉を投げ掛ける。

今度は小首を傾げる。

黒い影が何を言っているのか判らないが、変な人には違いない。

目の前の黒い影は笑いを堪えている様だが表情が隠せていない。

「そうかそうか。それは悪かったな娘。明らかに己が悪かったな。いやいや、間違いなく」

唇に手を添え、眼を細め微笑を浮かべる。

何のことを喋っているのか判らない。

何が可笑しいのか判らない。

何でここに居るのか判らない。

何故笑うのか判らない。

だが――――、

「……そう」

別段、嫌いとは思わなかった。

振り向けば奴がいる。

巨躯の大鬼を模した魔導兵器。

対人、対群、対城。ありとあらゆる戦争に駆り出される鬼の兵。

肘先を失った鬼神兵は己の腕を奪った敵を視認。

黒い影へと瞬時に伸びていく片腕。

まるで大木。

伸びた先に佇む黒い影。

鬼神兵は焦っていた。

片腕を奪われた事ではない。本能的に黒い影とは相対するべきではない、と深層意識が頑なに告げている。

だが止まる事は赦されない。

自身は使役されるモノ。主有っての自身。

自身の目的が、自身の生存理由だから。

「――――グオオオォォォォォォ！！」

腕は大木、爪は鋭く熊の様に。大口を開け地鳴りを上げながら自

身を鼓舞する。

その腕の先には奴がいる。きっと、奴を捕縛し片腕の礼と言って掌に捕まった黒い影を何の感慨もなく捻り潰すであろう。もしくは叩き潰すかの違いだけ。

鬼神兵だけではない。傍らに佇む魔法使いも同意見。

黒い影もそう思っている筈。だから動けない。

「――上等」

本来ならば、そうであった。

自信に満ち溢れた言葉を耳にするまでは。

†††††

「さて、と。ここに来たからには遣るべき事はやらんと。……おい娘、名は」

黒い影は娘に問う。

鎖に繋がれ膝立ちの少女の瞳の内に黒い影が映った。

柔らかな笑み。

無表情の少女と笑みを浮かべる黒い影。

少女の身長に合わせる様に腰を下ろし殺那、銀色が少女の眼前へと奔る。

「邪魔だから斬った。これで動ける筈だが、大丈夫か」

鎖から外れ、よろめく少女を支えながら口元の血をを拭う。

「もう一度訊くぞ。名前は何て言うんだ？」

問いに答えるまで一秒、二秒、三秒。

口を開き黒い影を一点に見詰め名を告げる少女。

黒い影は強く頷いた。

「……ああ。いい名じゃないか」

黒い影が笑みを零し少女へと向ける。

安心を与えるかの様に髪を撫でる。

くしゃり、と音をたてる様に乱暴、だが繊細に。

「まあ、少し待っていろ。なあに、時期終わる。いいな？」

「……うん」

少女を守護していた魔法使いが声を荒くして何か告げている。

だが、知った事ではない。

既に己の行動原理は識(し)り尽くしている。

銀の刀身が妖しく輝いた。

刃を向けるのは眼前に牙を見せる鬼の兵。

喩え図体が大きかろうと、一撃で森林を葬る事さえ出来る力を保有していようと、海を渡る程の脚部を持ち得ようと、大地を震わす雄叫び挙げようとも。

「――――上等」

ただ、黒い影はソレを“殺す”だけでいいのだから。

†††††††

――――それが、黒い影の始まりで一番最初の物語。

最初に出逢った少女を護るため、最初に仲間となった者と歩むため、再び刃を宿す事を誓った。

結局どうなったかは語るまでもない。

だって何れ知る事になるのだし、だったら今知らなくてもいいだろう？

ほら、美味しい物は最後までとっといておく……みたいな感じでさ。

とりあえず一つの御伽噺の一場面はこれで幕を閉じる事にしよう。

後の語り手は心配いらない。

勝手に黒い影が歩んでくれるさ。

黒い影の始まりを識っただけで終わりを迎えた訳じゃない。

ほら、飴玉でも舐めて待っててくれ。

そうすればきっと始まるからさ。

———あれからどれだけの月日が流れただろうか。

閉じかけた本に栞を挟み、一息入れる。

長椅子の軋む音がそれの年期を物語っており、より年月を感じられる。

「たまには、他人の人生を読むのもいいものですね。特に……彼のは断然」

馳せる思い。

懐かしき憧憬。

瞳の内は過去の記憶を映写し、過去に浸る。

呟きは宙に消え、誰の耳にも入る事はない。

懐かしい。そう、懐かしい。

何時しかあの時間が何事にも変えがたく、懐かしく、可笑しな人生の一部分だった。

喉咽で笑う。

頭に浮かぶのは、離ればなれとなった英雄達。

千の魔法を扱う鳥頭。

堅物な侍剣士。

豪傑な剣闘士。

爺言葉を使う師匠。

冷静な元政府の狗。

……この私。

「———そして、魔法殺しの異名を持つ彼……」

視線を膝元の本へと落とし、表紙を優しく撫で上げる。

題名が刻まれている分厚い書物。

タイトルは彼の名前。その本自体が彼の人生を表している。

暇潰しに、と本を開いてみたが時間を忘れて読み耽ってしまった。

「全く、一体何処で何をしているのやら。久しぶりに逢って、語り合いたいものですね」

湯気が立ち上るカップに口をつき、思わず頬が緩む。

口の中に広がる紅茶の味を楽しみながらゆっくりと見上げた。

今、彼は何をしているのだろうか。

さてさて、彼は一体どんな人生を歩んでいるのだろうか。

もしや、想像を斜め上を行く珍事を起こしているのではないだろうか。

もしくは、何もせず身を隠し一線を引いているのだろうか。

はてさて、予想が予想を生み、悩み悩むが正解は得られず確信が持てず迷信が軍配を上げる。

だが、それも面白い。

いつか、そう遠くない未来にきっと自分と彼は再び顔を合わせるだろう。

これだけは確信を持てる。間違いない。確証はないが、何となくそう思えてしまう。

「……なら、私はもう一度人生を読むとしましょう」

だから。

その時まで。

楽しみに待っておくとしよう。

†††††

この時から始まりつつある何か。

幕は上がり観客も揃いつつある。

ならば、劇団員はそれに応えるのが義務であろう。

期待された分、それに勝る感動と驚きを届けてみせようではないか。

だって、彼は英雄なのだから。

英雄の意味は人それぞれ解釈が異なる事を忘れないで欲しい。

何故ならば、心を占めるソレの存在の核が君の思い描く英雄の影。

影があるのならば見付けるのは容易いのかもしれない。

もし、影の本体を見付けたのならそれは間違いなく君は『英雄』となった者だ。

さて、話は終わりだ。頑張ってくれ、英雄の影よ。

英雄は必ず傍にいるのを忘れないでほしい。

## 第二話　慟哭童子、俯瞰月光

生い茂る密林。

行く手を阻むかの様に草木は根を伸ばし、葉は触れる皮膚を切り、茎は強引に足を止め決して折れる事を知らない。

この場の気温は異様に高く、湿気も同等。発汗を促す。

密林に一つの影。

長く広い密林を駆けるは小さな影、呼吸するは幼き姿。

性は女。それは見るからにそれは少女。

少女の息切れる声が密林のアンサンブルに加わる。

この地に居を構える獣の鳴き声、蟲達の囁き、木の葉から垂れ落ちる露の音。

少女の耳にはそれ以外入らない。

ただ走る。真っ直ぐと前のみを見詰め、一目散に走り続ける。

その身に纏う服は最早服とは言えない物。

布切れ。

それが一番形容しやすい。

所々血、埃が付着。見た目が酷い上により一層汚さが如実に現れる。

これよりマシな着る物はなし。

白光に輝き少女を見下ろすかの様に空に浮かぶ満月。

木の葉の隙間を潜り、その先の少女の姿を顕させる。

血漿。

赤を象徴とした血液は時が経ち過ぎているせいか、黒色へと変化していた。

布切れに色彩を付ける。

これは一体誰の血？

何故私は走る？

ここはどこなの？

誰か教えて？

一生のお願い。

誰か私に気付いて？

「ハァ、ハァ、ハァ……ハァハァ」

肺が酸素を望んでいる。上手く声が発っせない。走り続けた結果だ。

当然、疑問に応える者は誰もいない。

少女は走る。止まってはいけない。

止まったら、停止する、間違いなく。

止まるな、止まるな。命が停止してしまう前に。

「ハァハァ、うう……うあぁあああぁぁ――――」

に、に、げろ。にげろニゲロ逃げろ。

逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろにげろニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロ――――!!

そんな中で。誰かが泣いた。鳴いた。啼いた。哭いた。
そんな中で。笑った。嗤った。哂った。
そんな中で。そんな中で。そんな中で――――何かが。

闇き黒を纏う烏が哭いた。

森がざわめく。

黒い姿が夜の森に溶け込み、存在を隠蔽。

躯は小柄、しかし森自体が奴の躯。

この森は烏の領域。

瞳に映すは逃げ惑う少女。

視界から外さずただ一点、逃さずに少女を追い続ける。

数秒後、何かを合図する様に一哭き。

少女は気付かない――――否、気付く余裕もない。

もし気付いていれば、先の未来は変わっていた筈。

少女の人の路としての分岐点はこの刻。

表情に浮かぶは、不安、恐怖、絶望、寂寥感。

手足で森を掻き分け身体と心に鞭を打つ。

止まるな、走れ。

止まるな、駆けろ。

止まるな、翔けろ。

「――――惜しい。実に惜しいな、娘」

既に贄は放たれている。

「あ――――あああぁ……ああ！！」

少女の瞳孔は開かれ顔が青白く染まる。

鼓膜を揺さぶる魔の声量。

見たくなかった。訊きたくなかった。

現実から眼をそむく様に少女は叫びを上げる。

眼前に佇む妖魔。

人型をして異形。

背から開く黒き翼。

異形の瞳から放たれる重圧感。

己の歩みを強制的に止める殺気。

腰は落ち足は機能を果たしておらず、少女は地を這うかの様に引き下がる。

「い、い、いやだぁ、いやだ、いやだ、いやだぁ！！　しにたくないしにたくないしにたくない！！」

脳裏に宿るは両親の末路。少女を庇い死に得、亡骸となった父と母。

幼いながらも少女は本能で理解してしまった。

アレの様に自分は“しぬ”。

理解も出来ず何も出来ず、何も抗えず自分はアレの如く“しにたえる”。

涙で視界はぼやけ鼻から垂れる液体が呼吸を阻み声量は限度を超えており嗄れていた。

雑草を掴み妖魔———烏族に投げつけ、後方へ逃げ始める。

腰は烏族を視認した時から地に伏し、脚は震えて使いものにならない。

されど幸いなのは両手が動く事か。

必死に雑草を掴み身体を引き摺りながら烏族から離れようとする。

その生への執着心。

「ククッ。そこまでして生きたいか、禁忌の娘よ」

喉咽を鳴らす様はまるで嘲笑。だが刀は月の光を吸収し、艶やかな輝きを魅せる。

獲物は———目の前の禁忌の娘。

同胞である、烏族の娘。

全身に気迫が廻る。

人の様に指は五本、しかし体毛は黒く見ると肌の色は漆黒。

体毛に包まれた掌に力を込める。

長刀を握り潰す勢い。ギチギチと皮膚と柄が締まっていく。

烏族の男。名は無し。名なぞ不必要な存在。あってもなくてもどうでもいいもの。

ただ彼奴は目の前の憐れな童児を斬り結ぶのみ。

翼が音を立てる。まるで少女の残り時間を指し示す様に。

ミスはしない。ただ必殺の一閃を少女へと繰り出せばいい。

ミスはする筈もない。それ程男には自信がある。今まで人間よりも何倍も生き、何度もその儚い命を刈り取ってきた。

故に腕には自信がある。前文通り、ミスをする筈がない。

「……はっ、こんな処に珍しいのがいるな」

この場を崩す、イレギュラーさえなければ。

「――――ッ！」

「慌てるな大将。どうした、まだ敗けてはいないだろうが」

心の臓腑を鷲掴みにされた圧迫感。

急激な違和感に胸を押さえ烏族は視線をずらす。

横へ、横へ、横へと。

息が急に切れだした。刀を持つ手汗が酷い。

視界には既に少女の姿は無い。

逃げ出したか。だが、まあいい。決して逃げられる訳がないのだから。

だから、今は――――、

「主、何者だ。ここは主が訪れてよい場所ではない。早々に立ち去れ」

「別段、どこへ居ても己(オレ)の勝手だろうが。何様のつもりだ、烏族」

「……ほお。主、裏の者か」

「それを云うのも訊かれるのも己の自由だろう？」

何者かは判らない。ただ、黒い影が実体を表し言葉を介す。

いつの間に。烏族に小さな疑問が浮かぶ。

気配は無かった。もちろん、娘に眼をやっていたが周囲に“視界”は張り巡らしていた。

音も無しにここまで近付き、無防備な筈だったワシに一太刀も浴びせないだと……？

「――主」

脳内が信号を発している。

「何だ。烏族の大将」

やけに五月蝿い。鼓動も、脈動も、何かの警戒音も。

「……何用でここに」

五月蝿い、五月蝿い。ワシはあの娘を始末しなければならん。敗走なぞ赦されん。ワシは、掟に従い娘を斬る。

「何って……訊くも涙、語るも涙」

人と魔の子。烏族では赦されん白き翼の娘。存在自体が禁忌。

故にワシの目の前に居る奴は邪魔だ。最も、気付かれたからには斬るまで。

「ただの――私怨だ」

地が爆ぜた。

雑草を刈り取り土を抉り風が吹く。

懐に忍ばせた短刀が獲物を視て笑う様に妖しく煌めく。

別段、何て事のないただの短刀。

他と違うと言えば、多少頑丈に造られた程度か。

だが何故だろう。

ただの短刀にしか見えないのに、烏族には己の首を断つ断頭台に見えた。

「ちッ！」

身を屈めた体勢から逆袈裟。狙いは烏族の首。

長年の経験か、咄嗟に身体が反応し流す様に短刀を受け烏族の瞳は焦りの色を見せる。

それがいけなかった。

直ぐに体勢を立ち直せばいいものの、烏族の身体は受け流しただけで止まってしまった。

一体先程の舌打ちはどちらだったか。

黒い影の眼が細く、鋭く。獲物を狩る獲物へと成り変わる。

秒にも満たないさらなる追撃。

既に弐撃目の準備は整っていた。

腋を絞めた左腕は吸い込まれる様に烏族の腹へと放たれる。
“力”が籠った掌底。
地鳴りの音が炸裂、後方の木々を薙ぎ倒しながら吹き飛んでいく。
呆気ない終演。
最後に映った視界の内で、黒い影はどんな表情をしていたか。
そんな事、判る訳がない。
既に烏族の意識は無かった。
「……私怨、か」
初撃に反応出来た事には称賛を与える。
黒い影は不適に笑みを浮かべ小さく呟く。
私怨。つまらない理由だ。
得る物は何もない。進む時間のやるせなさと心にぽっかりと虚構がそう告げている。
三寸程の長さの刀身が月光を浴びる。
結局斬りつけなかったせいか、血に餓えているように見える。

そう、あくまで見える。

己には関係ない。ただ短刀としての役割を果たしてくれればそれでいい。

別段、武器に思い入れが無いと言えば嘘にはなるが……。

「さて、殺す事が目的ではないが。……少し、きな臭いな」

先程吹き飛んだ大将の台詞。他に目的がある節が見える。

さて、ここで思考開始。介入すべきか解離すべきか。

迷う素振りも見せず、黒い影の答えは決まった。

「袖触れ合うも多少の縁。ならば、その縁とやらは己に何を与えるのかな？」

走った。ただ無我夢中に。ただ振り切るために。

身体を覆う布切れに収まらない顔手足の肌が葉に擦れて赤みを増す。

もう汗は出ない。既に涙と失禁と共に全て水分は使い果たした。

視界一面緑の森を抜けるため両手を漕ぐように振り続ける。

どうかこの黒い路が終わるように。どうかこの昏い道が終わるように。どうかこの闇い時間が終わりますように。

既に足の許容限界は超えている。

だが未だに健在。それは最早精神云々の問題。

身体が泣いても精神は泣かず、生への執着、この空間から脱出こそが存在意義を示している。

空気中の水分を取り込むかの様に、舌を出しながら走り行く姿は犬のそれに似ている。

ギリギリ瞼に入る髪が鬱陶しい。いっそ、抜いてしまおうか。

だがその時間、運動量すら今は惜しい。ただひたすら走り遠くへ逃げる事を考えろ。

「ハァ、ハァ……ア、ハ……ハァ、ハァ」

どれくらい走っただろうか。生憎時間を知る術はない。

ふと、歩みを止めた。息を整えるためも兼ねてだ。

「……、……？」

耳を澄ます。聞こえるのは森のざわめきと烏の鳴き声、他には虫の求愛行動。

入り雑じる音の合唱の中、唯一自分が恐れている音が聞こえない。

不意に唾を呑み込んだ。他意はない。

あの烏族が自分を逃がすとは到底思わない。だって、あれは絶対自分をころそうとする眼だったから。

「……いや。し、しにたく……ない」

殺す、死ぬ。この言葉の意味を自分は理解していた。

消えて無くなる命の灯火。

噴き出す血流。

冷たくなるカラダ。

骸と化すヒトカタ。

真っ赤な血の海。

呆然と佇む人の子。

赤い死化粧に塗られた妖魔。

「――――う、ぶ」

酷く、気分が悪い。

喉元を襲う苦味に気を取られ少女は胃の中の物を吐瀉。

頭痛が、酷く。尚も波が押し寄せる。

消え去らない現実風景。夢ではなく幻想でもなく虚夢でもない、

少女が視認した初めての殺人現場。

“殺す”――ヒトの命を奪うこと。

“死ぬ”――ヒトの命が無くなること。

胸に重くのし掛かる不安感をそのまま吐瀉するとともに拭える。

鼻腔をつんざく匂いに眉が自然と顰める。

吐瀉物は胃液しか残っていない――否、最近の食事は水ばかりだった。

「……いま、にげ……なくちゃ」

遣るべき事は判っている。

痩せこけた身体、鉛の様に重い足に鞭を打ち再び一歩を踏み締める。

口を拭い、僅かに溢れた涙に気が付く。

思わず漏れた苦笑に肩をすくめその場を後にする。

「だいじょぶ……死なない、死なない、死なない……」

それは最早呪詛のソレ。

妄言にも近しい言葉の羅列が少女の意識を現実に留めている。

烏族はまだ現れない。今の内だ。走れ、遠くへ。逃げ延びろ、どこまでも。生きろ、果てしなく。生還しろ、必ず。

様々な思考が少女の胸奥に浮かび上がり消え去っていく。その繰り返しが続いている。まるで違う自分が話している様にも感じた。

ナニかが不気味に囁いてくる。

死ぬ理由がどこにある。何故両親と私(ウチ)が狙われなければならない？　掟、禁忌？　ふざけるな。そんなもので勝手に人の命を奪うな。お前達の傲慢な従いを何故守り死ななければならない。死ぬのはお前達の方だ。私は死なない。死ぬ理由がない。死ね、死ね、死ね。私は生きる。シアワセになる。お前達は死ね。空っぽのルールと一緒に死に堕ちろ――――と。

ふと気が付いた。

「――――な、何を」

まるで異なる誰かが己の身体を扱っていた様な不義を覚える。

訝し気に思いつつも、少女は首を左右に振り森を出るため突き進む。

少女は判らない。その眼が綺麗な弧を描いていたことに。

少女は判らない。その唇が妖艶に吊り上がっていたことに。

もうすぐで、少女の世界が変わることを――――識(し)らなければならない。

内なる少女の影は密かに嘲嗤う。

†††††

結局は。

無駄だと諭された。

どんなに足掻いてもどんなに抵抗してもどんなに立ち上がろうとしても、所詮運命には逆らえないのだ。

海で足が吊り溺れて助けを請うことしか出来ない様に。

無様にも程がある。

「……」

沈黙が少女を支配した。

顔は水分を忘れ乾ききり、手足は棒よりも遣えぬただの木偶となり、心は罅割れの硝子の如く。

夜目に利いた瞳は目の前の光景を茫然と享受する。

「久しいなムスメ。まさか逃げられるとでも思うたか？」

憮然の態度で鴉が鳴いた。

森に生息する烏が羽ばたいた。

呼吸が――――止まりそうになった。

目の前に居るは化生の類。己にとって、同族であり眷属。

少女は絶望した。否、絶望という文字で済まされるものではない。

「あ……、あぁ……ああ！」

たくさん、いた。

恐怖で喉元から声音が湧き出てくる。

視線を動かさぬとも判る。目の前に居るソレ以外にもまだ他に居る、と。

何体居る？

たくさん居る？

何で居る？

よくワカラナイ？

ああ――――どうして？

気が狂いそうになる。

「オイオイ、この餓鬼オレ達視て逃げもしないぜ。一体どういうこったよ？」

「大方既に体力の限界。逃げられぬと悟ったのだろう。えげつないものだ、こんな小さな娘が若いまま死ぬのだからな」

「カカカ！　違いねェ！　……しかし先に向かった奴はどうしたんだろうなァ」

何を言っているんだこいつ等は。

「うむ。ワタシも烏達を遣って探させてはいるが、未だ見つからん」

――――烏。ああ、こいつらの使い魔だったのか。

「この餓鬼と遭っていたならもう殺っている筈だロ？　もしかして、この森ン中で迷ってんじゃねえのカ？」

烏族達の哄笑が響き渡る。前、後ろ、右、左から。その笑い声だけで少女の身体は拘束させる力はあった。

膝が折れ地に落ちる。身体が思う様に動かない。

「ヒッ……」

烏族が下劣な笑みを浮かべて近づく。数秒後には少女の肉塊が誕生する。

救いもない希望もない反骨心もない。抗う力すらない。

もう先程の様な奇跡は起きない。

死ぬしかないのか私は。

「……やだ」

そんなの、嫌だ。

「……し、……にたく、ない……」

だけどもう、遅い。自分が何をしたのか等意味はない。恨みたければ恨みたい。だがその対象が居ない。

「……ハァ、ハハ……」

死ぬしかない。他ならぬ同族に。何と滑稽。恨むならこいつらか、はたまた、自身を産んだ両親か。

力すらない。蟻同然の立場にどうすればいいと言うんだ。

「ッ……ハハ、やだ……やだ」

この燻る気持ちを生かしたまま死ねというのか。蝋燭の火が灯ったまま蝋燭を溶かせというのか。

「――死――」

“殺那”、胸を穿つ様な鼓動を感じた。

「……な、んで」

誰かが。

「――――やだ」

どこかで。

「――――い、やだ」

せせら笑う様に。

「ハ――――、やだ」

少女という殻を破るかの様に。

「や――――だ、やだ……」

何かが。

「いやだ――――ッて」

嗤いながら。

「言って――――、イルンダ」

少女の内から、顕れた。

吐き出された吐息は、自嘲を含んだ墨色。

「私怨、か。甘いよなぁ本当。鼻で嗤いたくなる……馬鹿か己は」

それは至極簡単な恨み事。

森を縫う様に駆け先刻から肌を刺す圧迫感。次第に黒い影から笑みが浮かぶ。

「さてさて――――ん？」

一羽。烏が目の前に居た。

小柄な体躯が羽ばたく度にそれは巨大だと錯覚してしまう。

深紅の瞳は瞳孔が開き嘴は影を啄もうと直進する。

だから、黒い影は嗤う。

月光を吸収し煌めくは一振りの短刀。

懐から取り出した三寸程の刀身。駆ける脚部は止めず順手に構え――――三分割。

「悪いな烏族。監視されるのは趣味じゃないんだ」

語尾の後。頭部、胴体、両翼に切断された烏だったモノ。

土の栄養となる血飛沫を上げ、互いに交差し残ったのは黒い影。

烏の血肉は雑草に色を描き骨は咲く様に地に刺さり深紅の眼は闇を照らす月を遠く見詰めていた。

その場に残る空虚の間。

烏の死骸を俯瞰する月。

目指すは黒い影の行く手。

その先に居るは、空の少女。

†††††

私怨。

黒い影にとって許されるものではなかった。

かと言って表立って憤怒する事はしない。それはただ黒い影が達観しているとか心が老衰しているとか諦めていた、ではない。

初めは、信じたくはない光景を目の当たりにする。

久方ぶりに友人宅を訪れ、数刻出ていた間に友人一家は子一人遺して全滅していた。

襲撃した奴の目星はついている。

友人一家は退魔を生業とする家族。それは常に死と隣り合わせを

覚悟して武を奮い魔を退けていた。

だが所詮人は人。

生き残りを見つけた時、心底安堵した。

友人は息絶えるまで子を守ったのだろう。その表情は誇らしげに、まるでまだ生きているのだと勘違いしてしまう程。

子は両親が張った結界に護られ泣き叫ぶ。

黒い影はただ安堵し、ただ憤る。

ただ、それだけの話。

友人を襲ったのも烏族と判明し、既に仇は殺している。

ただ、それだけ。

だから森の中で不穏な空気を察して少女を見掛けたのも、それだけの話。

「――――」

前方に視得る小さなセカイに鋭敏に目を細める。

風が無いせいか辺りは醜悪満ちた香りに包まれていた。

土を踏む靴から感じる水分を含む音。鼻につく異臭が喉を唸らせる。

限りなく広い森の一角に生まれた新たなセカイ。まるで地獄絵図を表したソレは視た者の脳裏に一生残る程の衝撃を与える。

真っ赤なセカイ。

血肉、血飛沫に彩られた森の一角。視た者を恐怖に誘い狂気に身を震わせる。

滴る血液は狂おしい程綺麗で乱雑に転がっている肉片は堪らなく疎ましい。

付属された外套を翻し足を止め息を潜め、反転した“セカイ”を見詰める。

故に黒い影は刃を差し出し無表情にソレへと向けた。

「アア――――ハハハ、アア……」

一角の中心。

そこに居たのは、一角を支配する血に塗られた――――まるで、王の姿。

肉片の元となったモノをその小さく細い手足で裂いたのも乳歯で喉元を噛み千切り血を吸ったのも、このセカイを作り出したのも――――少女、だという。

「白髪、深い赤色の瞳、白き翼。……烏族の大将が追っていたのはこの娘か」

血の付いた指を愛でる様に舐める姿は艶かしく血色のセカイの中心で微笑む少女は妖しい。

頬に斑点として魅せる血、古ぼけた布はまるで紅葉を連想させる彩りを見せ妖艶な着物の様だった。

「――――反転。本来深層意識の中で眠っている烏族としての精神が死ぬ刹那に娘と代わったのか。見てみれば人と烏族のハーフ。……さて」

「――――ア――――、……れ？」

「と。元の少女に戻ったか。何というか……タイミングは良いな」

狂気に満ちた双眸は落ち着きを取り戻し、あどけない年相応の光を灯った少女へと代わり往く。

黒い影は血液の水溜まりを避け血肉を越え少女へと歩を進める。

少女が己へと気付いた時、黒い影は月光を背にして俯瞰する。

「気付いたのなら話が早いな。まずは質問に答えて欲しい。……君の名前は何と言うんだ？」

「……あ、れ？」

「ふむ、ではもう一度。あなたのお名前は何て言うのか教えてくれないか？」

「……判らない。わ、たし。名前……判らない」

得られたモノは少女にとって残酷なモノだった。

数拍、思考し次なる質問へ進む。どうかこの娘に光が当てられる様にと思考しながらもう一度黒い影は口を開く。

「――――じゃあ、己が名前を付けてあげよう。いいかな？」

まるで花の蜜の様な誘い。否、黒い影は興味を持ってしまった。否、見過ごす事は不可能だった。

少女の目線まで腰を落とし汚れた髪を撫でる。初めてなのか、眉を顰めているが嫌悪感は抱いてはいない様子。

目尻は緩み笑みが浮かぶ。こんな血溜まりの中で儚げな少女が生きる糧を与えてはいけないというのか。

「――――なあ」

黒い影は視ていた。この様な少女の例を。死に寸前、身体も精神も磨耗、生への執着を無くした者を、生きる糧を失った者。

黒い影は私怨で少女と出逢った。少女は逃げるために影と出逢った。

ならばこれは偶然だろうか。

これこそが必然というのではないだろうか。

「あなた……だれ？」

「――――ん。そうか、言い忘れていたな」

苦笑を携える。何時だっただろうか。全く同じ事を言われた記憶が脳裏に横切った。

少女の頬に付いた血を拭い、赤き双眸を直視しながら黒い影は口を開く。

――――黒い影を月は見下ろす。月光を全身に浴びる黒い影を少女は見詰めて、それがとても綺麗で神々しく見えてて羨ましく思って自分と遥かに違うと感じて、言葉を失う。

円を描いた月は黒い影を俯瞰する。まるで影と少女の邂逅を祝福しているかの様に。月光は森と明滅を繰り返す。それがまるで笑っている様に見えた。

そして――――。

「己（オレ）の名前は六斗。六斗って言うんだ。六つの為に斗（たたか）うモンだ」

「――――りくと、りくと……リクト。リクト！」

「ああそうだ。六斗だよ」

何度も言葉を繰り返す少女。その姿が何とも可笑しくて、愉しそうで、喜んでいて、新しい玩具を買って貰った子供の様で――――幸せそうだった。

「――君の」

「ふぇ？」

「君の名前は――“刹那”。これからは君の名前は“刹那”だ」

六斗の紡ぐ言葉。それは少女の新たな人生を創る決め手となる。

「せつ……な？」

「そうだ。君は刹那の子だ。人と魔、生と死、光りと昏(くら)き。その短い間(じかん)を往き来したんだ。故に、刹那」

“刹那”、刹那の感情は昂りを見せた。身体の奥底から昇る高揚感。心を満たす幸福感。全身に血液が行き渡る。その血液がとてつもなく刹那は熱く感じた。

「せつな……せつな、せつな、せつな！　わたしのなまえ！　わたしの、なまえ！」

「ああ――、宜しく。刹那」

英雄の影と人魔の娘は奇妙な偶然とも必然ともとれる縁をもってこうして出逢った。

六斗は微笑み、刹那は笑い、月も嗤う。

笑みの意味は千差万別十人十色。

だが、この血肉に溢れた地獄の中で笑える事はとても幸福な事だ

ろう。

## 第3話　絡め会う緋色の岸辺

それはガランドウ。

言い得て妙な話だ。

空（から）、空虚、虚無、満たされぬ器、中身の無い容器、穴の空いた出来損ない。

満たそうと満たそうと心掛けても満たされる事はなく、穴が閉じる事もない。

何も存在しない“世界”。一体どれ程の人間が確認出来るだろうか。

「――――」

否、限り無く不可能に近い。まるで空に浮かぶ月をこの手で掴み取る様に。

夜に光る大きな月。恐る恐るそれを、小さな手で握り締める。

「――――」

結局、掌の中には何も無い。満たされる事は決して無い。憂いを帯びた双眸に映る月は何を語る。

笑止。語る事は何もない。

遠い昔。満たされる事を識らずに大地を駆け抜けた。遠い遠い昔。語るのも億劫。

「何とも馬鹿げた話だ。全く、可笑しくて笑っちまうよ」

視界の隅に咲いている桜が小さな庭を彩り月光が誇張させる。縁側の戸に背中を倒し茶を啜り静かな時を送る。

夢視た世界。こんな世界を望んでいた世界。ココは驚く程自身にとって素晴らしき世界。学ぶ事は多く、嫌に笑える。

夜桜に見惚れながら月光を明かり代わりに遠き日を想いながら茶を啜る。

「何とも爺臭い。呆れて溜め息も出ない。だが———」

綺麗だ、そう呟いた後、後方から物音が耳に届く。

床と裸足の足裏が奏でる音に頬を緩みながらも、そちらへ見遣る。

「……おにーちゃん？」

「どうした？　いや、己（オレ）が起こしてしまったか」

寝ぼけ目を擦りながら己を義兄と呼んでくれる義妹に微笑が浮かぶ。

この娘こそ、己の唯一の友人の娘でありたった半日で独りとなってしまった悲しき童子。

身寄りの無い義妹を一人立ち出来るまで友人と約束した。それが己の出来る友人の手助けだから。

「ほら、寝なさい。明日、起きれなくなるぞ」

「んーん。だいじょうぶ。……おにーちゃんと居る」

「ん。そうか」

ペタペタと幼い足音を響かせながら己に寄り添う様に身体を傾ける。

その行為がとても微笑を誘う。子供は煩いが可愛いものだ。子を持たぬ自身は判らぬが、な。

「……明日、伝えたい事があるから楽しみにしておきなさい。きっと、喜ぶぞ」

「なーに、それ？」

世の汚れを知らぬ瞳で六斗を見詰める。眠気が勝っているのか浮わついた口調が返ってきた。六斗は絶えず優しく頭を撫で上げる。

「それは明日のお楽しみ、だ。まあ、楽しみにしておきなさい……とだけでも覚えておきなさい。月詠」

「む……はぁーい」

応えてくれぬ事が不服なのか頬を膨らます義妹、月詠。

やれやれ、と胸中で述べる。

出来ればこの娘にもあの娘にもこの世の穢れを知らないまま、過ごしてほしいものだ。

――宙に浮いている様な浮遊感と泥に囚われた様な重量感。

視力が失われているのか視界はぼやけ感覚という感覚が閉ざされている様な圧迫感。

誰も視えない。誰も居ない。誰も感じない。誰も思えない。誰も誰も誰も――――。

それは、本当に夢のようだった。

あの地獄から抜け出せたのも、黒い影の、〇〇〇という人に助けられたのも、新しい家族と呼べる存在が出来たのも。

全部、夢の――――、

「――――いやだッ！！」

思考の電源はブツリと途絶え、意識は一気に覚醒する。

上半身のみを起こし同時に両目は見開く。

小さな胸板と小さな肩は上下を繰り返し、肺は酸素を欲し空気を貪る。

額から落ちる一粒の光。

汗、と感じた頃には己が何処にいるのか視界が周囲を確認する。

視界は良好。感覚は機敏。額の汗は既に顎から滴り、掌の汗が握った布団に染み込んでいた。

「ここ……」

和風で敷き詰められた一部屋。八畳の広さ、箪笥に本棚が鎮座しており、数枚の座布団が重なっている。そんな部屋の中心にいる己が何とも小さく思えた。

ゆっくりと立ち上がる。立ち眩みを覚えゆらゆらと幻の様に身体を揺らす。

「ッ……」

頭を抑え外へと繋がると予想される障子へと手を掛ける。

和風に包まれた静寂を持つ部屋。

空間を完全に断絶されているともいないともいえる曖昧な、朧気さを醸し出しいて東洋的な空間をもたらしている。

静寂な空間。

その空間はいつの間にか部屋を出ていく者の苦しみを吸出していた。

彼の者に巣食う悪夢。今はその一欠片も残っていない。
呼吸を落ち着かせ、前へと進む者は気付く事はない。

†††††

「――お。漸く起きたか。そろそろ昼飯にしようかと思っていたところだ」

夢じゃ、なかった。

「あ――」

「待ってろ殺那。今準備を――を？」

気が付けば彼に飛び込んでいた。

抱き着けば抱き着く程、胸から込み上げてくる高揚感を抑えきれず。涙を流せば流す程、不安は消え去り安心感が浮き上がる。

「あぁぁ……はっ、はっ、あ、ひゃっく……」

「……ああ、そうか。そうだな、そうだよな。――刹那。今日から己（オレ）がお前の家族だ」

「うううぅ――あああぁぁぁぁぁぁ！！！」

小さな少女の小さな頭を撫で上げる。柔らかな笑みが刹那へと向けられる。

六斗は微笑む。この娘を救えた事に。この娘が幸せを掴める権利を得る事に。

刹那に権利を与えた六斗はもう何も言わない。後は少女が歩むべきモノ、選択すべきモノ。

出来れば、刹那も月詠も人並みの幸せを――――と思うが。

「……安心しろ。ここにお前の幸せはある。幸せを掴めよ、刹那」

「うん！　うん！　うん！」

少女は泣き叫ぶ。刹那と名付けられた少女は泣き叫ぶ。

彼らの姿を淀みなく彩る一本の桜が鮮やかに咲き誇る。

六斗が“桜が枯れない”と桜に施した術式。友と宴会を交わした際に記念にと綴いた術式。

その桜が彼と刹那を見守る様に咲き誇る。

桜が咲く。

桜が咲く。

桜が咲く。

“桜”が“咲”く。

———後の彼女の姓となる誇るべき存在。

ある日の時刻、どこか静かな和室で。畳の匂いが気持ちよく、眠気を誘う雰囲気が漂う場所で。

彼女と彼女と彼が居た。

「はじめましてー。わたしの名前は、つくよみっていいます～。よろしゅうな、せつなちゃん」

「……」

「刹那。月詠は己の家族だ。だから刹那の家族でもあるんだ。堅くならなくていいんだぞ」

おずおずと不安顔で月詠の手を取る。何だか人慣れしていない仔猫の様相に自然と頬が弛む。

偶然、必然、とは言え刹那を家族に迎え入れたのはいいが不安もある。だがそれは後でもいいだろう。今は慣れが必要なのだから。

昼飯を共にしながら互いに手を取り合う少女達。無垢な笑顔を浮かべているが背景は醜悪に満ちた原風景。

腕に込められた力を止めず、思考する。

「――――」

己自身に出来る事を。

己自身がやるべき事を。

己自身のすべき事を。

己自身がやらなければならない事を。

「――――どうでもいい、な。後だ後だ。面倒くさい」

思考が氷解する。澄みきった脳が新鮮な血液を欲しているのがいや程判る。

「何とかなるさ、な」

「んー？　何か言ったー、おにーちゃん？」

「いやいや、何でもない、さ。ほら片付けは己がやっておくから。月詠と刹那は外で遊んどけ」

「わかった～。ほな、いこー、せつなちゃん」

「あ……う……！」

昼は長い。世界を見詰める太陽が沈まぬ限りこの光を浴びる者は笑みを浮かべるだろう。

限りない笑みを。

それは、六斗が視た天使の様な貌(カタチ)をしていた。

過ぎ去った過去に縋り歩んだ道に嘘をつき夢想を見続け果てぬ未来を追い続け。

今は到達出来ない事は判っている。今はまだ時間が足りないのだと燻っている。

足掻けば足掻く程、泥が己を沈ませる。手足は石の様に固く意識が空へと投げ出される。

諦めた、永久に眠るのだと確信したとしても。

「あはは～。せつなちゃんおそい～」

「あう……まって、よ……！」

きっと、彼女達に笑顔を生ませたのは間違いなんかじゃない。

†††††††

空気に融ける熱の吐息が森を刺激する。

闇を彩る自然の色が視界を覆う。この暗さが自身を支配していると思うだけで口角が吊り上がるのが抑えきれない。

土を踏む脚がドクドクと熱を帯びる。バネというバネを用い、ただひたすら真っ直ぐに駆け出した。

「まだ――――まだ！！」

風という防壁を切り裂き抵抗という抵抗を割き、身体を突貫。まるでそれは大砲。

腰を限界まで捻る。ネジの如く、ネジの如く、ネジの如く。捻り捻った腰（ネジ）を戻すのは至極自然。

「疾ィ――――！」

道を遮る巨木を断つ。長年の相棒の短刀が嗤う。まだまだ、とこんな巨木に使用した事を罵っている様に。

短刀の心情は知らぬ。ただ目的の地へと身体に流れる電流を回し続けるだけ。

光閉ざされた空間は黒い影の存在を消した。

地を蹴る一歩。空を蹴る一歩。全て逸脱された一歩。

口角はさらに吊り上がり碧色の双眸は大きく開かれる。

「――――さあ、ヤるぞ」

思考の隅に置かれているのは二人の少女の笑顔。

消える事のない笑顔の記憶。それを消すというのなら、こちらから消してやろう。

だから。

六斗という黒い影が烏族の群れを消そうとするのは当然なのだろう。

「夜はまだ長い――――ぞ！！」

まずは一つ。通り様に辻斬り。首を刎ねる。中枢を失った烏族の躯は正に壊れた噴水。

絶えず吹き出る赤き水。短刀の渇きが嘘の様に潤う。刀身に血液が滴る度に哂う。

噴水の如く空に吹き出し血液が空気を妖しく彩る。命の停止を確認し、視界を真横へ見遣りもう一度同胞を刈る。

懐へと潜り、一閃。紫電が走り烏族は解体される。

「――――ふう」

結果、二体の遺体が出来上がった。

吐き捨てる様に嘆息。憐れみを込めた言葉をソレに擲つ。

「何だ、烏族はこの程度か？　哀しませるなよ。これじゃあ童児の方が強いぞ？」

「――――言うねェ、小僧」

瞬間、六斗の背筋を悪寒が走る。

黒き闇色の翼を生やす烏族が空を裂く。長年の友と呼べる得物を携え、言葉足りなくほぼ同時に六斗の背後から袈裟斬り。

左足を軸に右足を円運動。振り向き様に短刀をなぞるように得物の刀身へと走らせた。

森中に重なり響く軽工音。脚部を支える地盤が砕け沈む。

「受け止めるか。中々やるのォ、小僧。して、何様か。まさか死にたいがために来たのではあるまいな」

「話が出来そうな奴で助かる。己が遣る事はただ一つ。この森の烏族の殲滅――――だ」

理由何ぞ児戯に等しい我が儘で自己満足に過ぎない。

家族として迎え入れた刹那を捨て遣った烏族に静かに憤慨した。

先に月詠の両親、己の友人を殺された事もあったせいだろう。

全く。己は何時から激情化したのだろうか。この世界、殺し殺され何ぞ、当たり前だと言うのに。

即座に後退し、烏族を見遣る。大きく拡げられた翼、仮面の様な顔、躯は全体的に逞しく、鋭さを持っている。

だから、何だと言うんだ。

「ほォ。殲滅ときたか。そんな時代は当に終わったと思うたがまだその様な莫迦が居たとはな」

「遣りたい事が出来たんだ。なら、殺るのが筋ってもんだろう烏族。――なあ、迫害した禁忌の娘は知っているか？」

烏目が見開かれた。それだけで理解したと伝わった。なら、後は殺るだけ。時間制限は夜が明けるまで。だが――、

「暇ではないが一応暇なんでな。遊んでやるよ」

烏族は自身の目を疑う。今まで黒色だった彼奴の双眸が碧色へと変化をしたから。

「これは珍しい。魔眼の類を持つ人間か」

「遊んでやるって言ったろ。機嫌が良いんだ、早くしてくれ」

「笑止。ならさっさと逝けよ――小僧ォ！！」

烏族は地を爆ぜ六斗へと迫る。口角を上げた六斗が短刀を構える。

烏族の怒声が森を蹂躙して数秒後。

森に戦いを阻まれた月が碧色を確認した時、勝負は簡単に終わっていた。

†††††††

「――――あれ」

ふと、眼が醒める。昼頃にあれ程遊んで疲れたというのに、眼が醒めてしまった。

視線を横へずらすと涼しげな寝息をたてている月詠の姿が。

六斗が用意してくれた布団に月詠に半ば無理矢理一緒に寝てしまったのだと思い出す。無理矢理だったが、悪くはなかった。むしろ、良い。何だか心地好かった。

「……リクト」

恩人の名前を知れず刹那は呟く。

胸に手を当てるとトクトク、と心臓の音色が聞こえる。

恩人を思うと、さっきより心地好かった。何故だか判らないが彼は“家族”だから、と解釈する。

「……リクト」

再度、呟く。綺麗に櫛で整えられた白髪は寝癖で所々跳ねていたが、前髪だけ眼に掛からない様に横へ掻き分け、布団から脱する。

今更布団の温もりが恋しくなったが瞳を障子の外へ向けて、歩き出した。

彼は、呆気なく見つかった。

「――なあ、知ってるか。世界を全て殺しても、得るモノは何一つないって事を」

まるで、懺悔の如く。

「見ろよこの足掻く月を。雲に隠されないように必死で風と会話をしている」

まるで、自身への呵責の如く。

「手を伸ばして、伸ばして――それでも。叶えるモノは何一つなかった」

まるで、子供が慟哭するが如く。

「得るモノは得て。無くすモノは無くし。壊すモノは壊し。生むモノは生み。殺すモノは殺した」

見ていてそれは、夢の様に幻想的だった。

「なあ、見てるかお前達。今はまだ、逢えずとも。何時か必ず再び逢うと誓おう。だから今だけは――夢を、視させてくれ」

それを語り尽くす六斗は、刹那が視る限り哭いている様に視得た。

血濡れた外套が刹那の視界に色を塗る。歩んだ足は完全に止まり、

されど彼へと伸ばされた手だけは掴むことが出来た。

「それは、嫌なことじゃない。だって、そんな顔してないもん。夢だって、本当のホンモノなんだから」

赤い瞳は澄み渡り、血濡れた外套さえも曇りを見せる。

冷えた空気に白い吐息が吹き掛けられ、月光を通す刹那の髪色をより魅せる。

身体、心は幼くとも精神だけは鍛えられてしまった刹那。彼女を縛る不可視の鎖は一生消える事はない。

魂に巣食う“烏族の血意”は少女が死なぬ限り生き続ける。もがき苦しみ苦悩し悔やみ足掻き蔑まれ罵まれ侮蔑され世界から忌憚され絶望し希望が潰える———それが、刹那自身の魂の原風景。

「———なあ、刹那」

「ん。なーに……？」

「お前が居た烏族な。アレ、己が全て消した」

「そう、なの」

「……ああ」

要らない玩具を捨てた様な平淡な口調で語る。縁側に腰を掛けている六斗の背に刹那は身体を預ける。

泣き止まない子供をあやす母親の様に。笑んだ表情は子供が見せる笑顔ではなく、一人の女性として魅せる笑みだった。

小さな身体は疲れた身体を癒す材料となり、帰り血が付いてしまうというのに、身を寄せてきた小さな配慮に今の六斗に安心感を生む。

それでも、彼は少女の笑みに気付かない。

「リクトと、月詠はわたしの家族だから。もう、一人は厭だから。絶対に、わたしを一人から脱け出させてくれたリクトを消させたりしない、から」

「そう、か」

「うん」

「……見ろよ、刹那。月がこんなにも綺麗だ。その綺麗さ故に心が痛むというのに、何故月は察してくれないのだろうか。憎いよ、月が。羨ましいよ、世界が。己は綺麗な月となりたい」

首に巻かれた細い腕に掌を重ねる。夜の気温に冷えた掌は柔らかく、少女特有のあどけなさが表れている。

哀しみに満ちた涙を流さず、安堵に満ちた吐息が外へ洩れる。

烏族は居ない。全て六斗が殺した。跡形もなく、証拠を遺さず、痕跡すら見当たらない完璧な殲滅。

圧倒的な破壊。どんな攻撃も殺し、殺した。烏族の最後の一人が

見せた最期の顔は今でも憶えている。

「取り敢えず、寝るか」

「うん」

面倒臭い。そう烏族の記憶を一蹴し忘れる事にした。

刹那を迎い入れてから一度目の夜が過ぎ二度目の朝が顔を出す。覚醒した脳が徐々に活発に働きだし、新鮮な空気を肺に取り入れる。

二度寝を勤しみたいが、刹那と月詠もいる。固くなった身体をほぐしながらとある場所へと足を伸ばす。

「……ふう」

朝の日差しが木の葉の間を掻い潜り影となった身体に光の斑点が生まれる。

何て事ない小さな芝生。裸足のため足裏を続く葉の一つ一つが擽ったい。

「――――」

この場で行われる朝の修練。息を吐き出し思い浮かぶは空想上の最強の敵。

神秘を用いる最高位の魔法使い、神格クラスの幻獣、己では到底太刀打ち出来ない程の力を持つ化生。

頭の中では既に目の前にいた。

瞳がうすらと開かれる。どこまでも澄んだ青空のようで、深海の底を写したかのような碧の色。

合図なんて必要ない、ただ、目の前の彼奴を倒す（ころす）だけ。

「――――ッ！」

身体が動く。

逆手に持った短刀が生き物の如く空を駆ける。

蛇の様に腕を操りを鷹の様に相手を見遣り獅子の様に敵を襲い蜘蛛の様に逃さない。

地を爆ぜ、肉薄し紫電の一太刀。空を切り裂いた後に残る耳鳴りが否応なしに聞こえる。

雑草に音を与えず裸足の脚に雑音を与えず。地だけは静穏を保っていた。

脚を折り腕を裂き胸を抉り敵の首を刎ねる。

何時だって勝つのは己。それは当然だ。自身が想像するのだから、負ける道理等存在しない。

「オ――――ラッ！」

常に思い浮かべるは勝利の余韻に浸る己。何時だって最強。そう脳内だけには伝えてきた。

袈裟懸けに一振り。

勝負はいつの間にか、呆気なくもついた。

「……」

若干荒い呼吸を整え、短刀を仕舞い感慨もせずにその場を後にする。

「何時だって世界はこんな筈――――なんだよなぁ、皮肉にも」

刹那。月詠。

この幼子が一人立ちするまでは守ろう。世界が敵だとしても、守りきろう。

喩え身体が死のうとも魂のみ遺して守ろう。無理と言われても遣りきろう。不可能でも可能にしてやろう。

「それこそ、不可能を可能にするのが人間だからな」

無風だった芝生に、細やかな風が六斗の背中を押した気がした。

†††††††

魚の焼ける香ばしい香りに鼻が誘われながら、居間へ赴くと既に

起きていた二人の姿を見遣る。

「……何、やってんだお前達は」

「あ、おにーちゃんおはよーさん」

「お、はよ。リクト……」

無意識に出てくる欠伸を堪える。眠気が突然六斗の身体を襲う。

前夜は刹那を寝かしつけるために横にいてやり、余り寝ていない。

首に手をやり小気味良い音を鳴らす。ふと自身を父親みたいだな、と阿保らしく思ってしまう。

「おにーちゃん、今日はピクニックに行くでー」

「ほ———う。ピクニックか。そらまた突然な事で。刹那が考えたのか？」

刹那は小さく頷く。

「良い案じゃないか。では、己も準備をするかな」

「その前に朝ごはんやー♪　朝は食べないと力でないでー」

月詠の和らかな笑みを浮かべ、その声に六斗も刹那も連鎖する。

食欲のそそる匂いを嗅ぎ付け腹の虫が陽気に鳴いた。

存在するは、英雄の影、半人半妖、狂人。

六斗、刹那、月詠。

限り有る日を平穏に過ごし刺激ある1日を胸に刻みながら記憶する。

平穏なんて有り得ない。刺激ある一瞬が人を成長させる。

誰しもが望む平和。だが、十人全てが平和を望むのか。そんな戯言、誰が応えるというのか。

喩え、敗退のない人生でもそれは刺激があるのか。喩え、常勝の人生でも自身の価値になりえるのか。

本当に、戯言だ。

刹那は六斗に縋り、月詠は精神安定剤として、六斗を必要とする。たった数日前に零となった箱に“六斗”が納められた不幸の体現。

世界を知らない少女達の過去が不幸だとしても、常人より悲惨で哀しみに満ちた人生だとしても。

「「「――――いただきます」」」

何れ、決めるのは少女達だ。

†††††††

さて。

急遽月詠・刹那両名主催のピクニックは晴天の中何事もなく終わりを迎えた訳で、現在数日が経ったある日。

準備に追われる輩が一人。

家中を右往左往、見るに堪えない程の書物と小道具を重ねて足音を響かせる。表情は普段と同じく平淡だがどこか強張った部分が欠片として見受けられる。

そんな家主を指を咥えながら見遣る刹那と月詠。疑問符が混じる視線を送りつつ、その場に立ち尽くす。

先日行われたピクニックの内容については楽しく、面白く、良い思い出となった事だけを伝えておこう。

珍しく慌ただしい家主がガサ入れしてから数十分。

「刹那、月詠。お前達に伝えておく事がある」

黒曜石の様な黒く澄んだ双眸が少女達を貫く。背筋を凍らせ一切の反論を許さぬ不動のソレ。瞳に身体の自由を奪われながら、吸い込まれそうな感覚を憶えながら必死に耳を傾ける。

思えば、少女達にこの様な視線を向けるのは初めてかもしれない。一瞬脳裏に過った考えを思考の海原に捨て置き、視線と視線を交じり合わせる。

少女のどちらか、はたまた両名の息を呑む音が鼓膜を揺すり平淡

な顔に鋭さが増す。

「お前達と過ごして早一月となる。長いか短いはそれぞれとして――」

懐に手を入れ現れたるは愛用の短刀――――否、巻物。

短刀では無かった事に多少なりとも安堵する刹那。封をされた巻物を前へ置き一瞥した後、再び六斗へと見遣る。

「これはある流派の技を記した巻物だ。月詠は知らずとも、月詠の両親はその流派に属しており大切な流派の巻物の保管庫の一つを任されていた」

「……そーなの？」

「ああ。大半は焼け落ちてしまったが、これは無事だった一部だ。これをある人物に届けて欲しい。そして……お前達はそこに住まわせてもらえ。紹介状は既に書いといた」

「「――――え？」」

二人の声は事前に打ち合わせしたかの様に不気味に合っていた。

瞼を閉じ、口を閉じ、まるで置物の如く居座る六斗。彼は気付かない。刹那、月詠の変化に。

幸か不幸か、それは、気付くのはまだまだ先の未来の話。

「……」

時が止まった、或いは心臓の鼓動が酷く高鳴ったという形容が今は合っていた。

一体どちらの沈黙なのか。判らない、判らない、判らない。

何で、どうして、判らない、おかしい、教えて。そんな言葉の一つ一つが喉まで昇るが声として現れる事はない。崩れる精神の音を訊きながら刹那は歯を徐々に鳴らしていく。隣の月詠は顔を俯かせ、前髪が瞳を隠しており表情が判らない。

「己は、少し行かなければならない用事が出来た。だからここでの生活は終わりだ」

———嘘だ。

「……何？」

紹介状を前に並べた六斗が霧の様に淡く掠れた声を聞き取れず眉根を寄せる。

「……何だ。言いたい事があるなら言ってみろ」

冷風のような声色が少女達を貫く。鋭利な槍のような瞳が追撃。ビクリ、と月詠の肩が震えた。

「……だ」

それでも。

「……う、……」

捕食者に喰われる被食者の如く。明らかに分は六斗に有る筈なのに。

「……うそ、だ」

初めて、自身の存在を見い出してくれた相手に牙を向ける。

ただこのまま過ごしたいだけ。

ずっとずっと一緒にいたいだけ。

いつまでも近くで見てみたいだけ。

「―――嘘だ」

だから、黒い影から生を貰った半妖はその言葉を偽りだと信じたかった。

自分の意思が、自分を拾ってくれた恩人と同じ意思だという事に。

「うそだ、―――嘘だ、ウソだ嘘だうそだ……」

「せっちゃん……」

気付けば震えていた肩は鳴りを潜め、沈黙を保っていた月詠の身体は暖かさを取り戻す。

表情は暗闇で見えずらく、尚も連呼する白髪深赤瞳半人半妖。

真摯の気持ちを眼の前の恩人へぶつける。

「嘘――――だ！」

「いや、何が？」

返ってきた言葉は以外と軽く、不意を突かれた刹那は思わず俯かせていた顔を上げる。

「お、オイオイ。何も泣く事はないだろ？」

「ッ……！　だ、だって！」

「別れるのはどうしようもないが、それは一時期だけだ……ぞ」

組んでいた両腕を解きながら、

「お前達がもし良かったら、また俺が引き取ってやる。どうだ。表に生きるか、裏に生きるか。選ぶのはお前達だ。まあ紹介する奴は安心しとけ、面倒は見てくれるから……な」

子供もあやす親の様に片眼を閉じながら微笑んだ。

「せっちゃん」

「……つーちゃん」

恩人により救われた命二つは互いに顔を見合わせ、ゆっくりと破顔する。

意思は届いた。

なら、届かせる意思も同じ。

意思を伝える。もう、ただの人形じゃない。

「「ずっと待ってるから！！」」

少女達の笑みは確かに嘘なんて含まれてはいなかった。

†††††††

六斗は紹介状と巻物を渡し、見送った。行き着くまでの荷物は持たせた。何より、少女達ならば無事に着ける事を識っている。

左手で頭を乱暴に掻きながら右手で指と指を擦り合わせて、音を鳴らす。

胡桃が割れたような軽い音が六斗の耳を心地好くさせる。

軽音が水面に波紋を描く様に広がっていき、それは次第に六斗が住まう一軒家まで届く。

その間、僅か二秒。

一軒家を中心に庭に咲いている桜の木が徐々に歪に吸い込まれていく感覚で歪んでいく。

絵の具と絵の具を混ざり合わせる様な、そんな簡単な動作が眼の前で繰り広げられていた。

空間が歪に歪み歪曲していく。跡に残ったのは真っ平な空き地と無色透明のビーダマ。

掌に乗った小さなビーダマ。光を反射しながらキラキラと自己主張を繰り返すビーダマを懐へ仕舞う。

「さて、と。そろそろ行こうかね」

空き地を俯瞰し感慨深く呟いた。

後腐れは既に無く、早々に立ち去る。足取りは軽く、心は黒く澄んでいる。

土踏む感触が足裏を心地好く感じさせ踏み鳴らす音が耳朶を愉快に打つ。

陽の光が届かない森を迷いなく六斗は歩く。迷路の道筋を知っているが如く。

森の影が六斗の姿を隠しそれは否応なしに似合っている。影こそが居場所のように、表情も何処と無く柔らかい。

ふと、つい最近まで共に暮らしていた子供の容貌が脳にちらついた。

刹那。月詠。

待っている。そう己に告げた少女達の生い立ちは常人とは比べられない程歪んでいる。

親は死に、世界の裏を識り、抗う力を持とうとするがその心は傷だらけ。

一方は妖魔の血を半分持っており、一方は狂気に見初められている。

半魔（妖）半人。狂人。

全てを識らなければ常人として生きられただろう。一般人として幸せを掴み取れただろう。人並みに過ごすことが出来ただろう。

「――――」

何も遅い話ではない。直ぐ様少女達の下へ戻り説得をすれば聞いてくれるかもしれない。

少女達の事だ。きっと聞き入れてくれる。

「……無粋、だよな」

だが。しかし。

少女達の人生を日常に変えた処で、少女達は非日常の存在。何の意味も持たない。

少女達は最早日常の存在ではない。仮初めの日常を手に入れた処

で、非日常の渇きが少女達を求めてくる。
喩え六斗が日常に引き入れたとしても、待っているのは非日常への誘惑、日常への渇望、贋作の幸福。
だから、無粋。
既に常人ではない少女達にこれ以上の無粋は必要はない。
それはきっと、侮辱に値する筈だから。
……もし。
もし。
もしも。
もしもの話だ。
月詠の家族が殺されていなければ。
刹那が自身の正体を識らなければ。
六斗がもっと巧く行動していれば。
「変わって……いたのかもしれないな」
全てはＩｆの話。幾つかある道筋の一つ。
そんな過程と結果があったかもしれない、と言う救いの話。

自身に向かって哂う。都合の良い事ばかり考えて、目先の事を良く考えない。何時まで経っても変わらない。

気付けば、歩みは止まっていた。

「そう、思わないか？」

気付けば、風景は変わっていた。

「……何の話だ」

「都合の良い人生があって欲しいって願っちまう、って事だよ」

気付けば、風が囁いた。

笑う。含みのある笑みで。六斗と、ソレも。

何度目の邂逅だこれは。ふと考える。一、二、三、四……、

「五十二だ。覚えておけバカ者」

「もう五十か。早いな」

「アホ。まだ五十だ。私にとっては砂漠の砂に等しいくらいだぞ」

ソレは、浮かんでいた。虚空に地がある様に。古く布地の外套を羽織り、薄く笑う。

金髪が夜の月光の下では良く映える。

「どうでもいいわ、そんな事」

「どうでもいい――――だと？」

「だって、戦（や）る事には変わらないからな」

五十三回目の邂逅に、六斗は慣れた様に事を進める。刹那と月詠と別れたのもソレが原因。

だから、さっさと戦って、少女達の下へ帰らなければ。

ずっと、待っててくれるから。

「余興が無いのつまらんな」

「そんな時もあって良いと思うぞ。なあ、エヴァンジェリン？」

月夜の下、真祖が影に牙を向く。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8441m/

---

されど現実は夢の如く

2010年10月28日02時47分発行